様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：３０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2015
課題番号：２４７００６５４

研究課題名（和文）植民地朝鮮における対日協力とスポーツに関する研究

研究課題名（英文）The study of cooperation with Japan and sports in Colonial Korea

研究代表者
金　誠（KIN, Makoto）

札幌大学・地域共創学群・准教授

研究者番号：４０４５３２４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は植民地朝鮮における朝鮮人知識人層ならびにスポーツ選手らのスポーツ活動が総力戦体制期の対日協力行為に如何に結びついていったかについて明らかにするものであった。本研究ではとりわけ植民地朝鮮において英雄となったマラソン選手の孫基禎に着目し、民族の英雄となった孫基禎の対日協力行為を当該期の朝鮮人知識人の近代的志向性と複雑に絡まり合うなかで生起してきた行為であったと結論づけ、植民地下の朝鮮半島におけるスポーツと対日協力の問題について考察を行った。

研究成果の概要（英文）：This study was to clarify the sports activities of Korean elites and athletes cooperating with Japan in Colonial Korea. In this study, focusing on "Son Gi-Jeong" who is the most famous marathon runner in Colonial Korea. In the 1936 Olympic games in Berlin , he got the gold medal and he became the hero among Korean people. However progressing Japan's war regime forced him to cooperate with the Governor-General of Korea. His act of cooperation with Japan was influenced by Korean elites who had modernistic senses in this period. Cooperation with Japan in sport in Colonial Korea was an intricate problem between modern thinking of Korean elites and the Korean athlete's behavior.

研究分野：スポーツ史

キーワード：植民地朝鮮　スポーツ　対日協力　ナショナリズム

１．研究開始当初の背景

植民地朝鮮における体育・スポーツ史に関する研究は大きく分けて二つの傾向がある。ひとつは体育・スポーツが植民地政策やメディアの影響によって植民地住民をその支配体制に組み入れる役割を果たしたとする研究［西尾 2003；金 2003；森津 2011］であり、植民地権力の影響力を体育・スポーツから分析しようとするものである。またもうひとつが植民地支配に抵抗した朝鮮人の民族主義的なスポーツ活動に着目して行われた研究［李 1990；鄭 2008］であり、このとき朝鮮人の体育･スポーツは植民地権力に対する「抵抗」(日本人に対するスポーツでの勝利や対抗意識)として強調される。この二つの傾向は日本と韓国における研究者の視点の相違や選択・分析される史料の相違によるものではあるが、植民地支配体制を体育・スポーツからどのように批判できるかという点で両者における問題の所在は一致してきていた。

このような植民地支配体制を批判するときのひとつの指標として植民地社会における「近代化」の問題は避けられない。例えば植民地社会事業研究では植民地朝鮮において実施された社会事業の特徴を「抑圧された近代化」と結論付け、植民地社会における文化的基層の実情が植民地権力による近代化政策にそぐわなかった点について言及している［大友 2007］。近代化を指標とする研究と体育・スポーツ史研究の動向を重ねると、如何に朝鮮民族のスポーツが植民地権力によって抑圧され、体育・スポーツによる植民地支配体制の強化が図られてきたのかという傾向に集約される。しかしこうした支配―被支配という二項対立的な傾向の研究は多くの成果を提出しながらも植民地社会における体育・スポーツの様相を限定・規定してしまうきらいがあった。

それに対して植民地朝鮮研究のなかで提起されたのが植民地近代(Colonial Modernity)という分析概念であった。植民地近代の議論は植民地公共性の問題も含め植民地社会を捉えなおそうとした点で評価される［並木 2003；2006；松本 2002］。植民地近代を分析概念におく研究では支配－被支配、国家－民族といった二項対立の捉え方から脱し、植民地住民、朝鮮人知識人層の「協力」の様相も踏まえて研究がなされる［井原 2010］。しかし、これまでのスポーツに関わる先行研究においては当該期のスポーツ活動を植民地権力との「協力」という視角から研究するものは皆無であった。

２．研究の目的

そこで本研究では、植民地朝鮮における朝鮮人知識人層ならびにスポーツ選手らのスポーツ活動を対日協力という視角から明らかにする。とりわけ本研究において着目するのが植民地朝鮮において英雄となったマラソン選手の孫基禎、またこれまで民族を代表するスポーツ組織として紹介されてきた朝鮮体育会である。民族の英雄となった孫基禎の対日協力行為を説明するときに朝鮮体育会の朝鮮人知識人らの近代的志向性を無視することはできず、彼らのそうした志向性と英雄を生み出すスポーツ特有のシステムが植民地朝鮮におけるスポーツと「協力」へと複層的に結びついていく点を明らかにしていく。

３．研究の方法

(１)植民地朝鮮における朝鮮人知識人らの近代的志向性とスポーツ、「身体」に関わる問題について『東亜日報』や『東光』などの新聞雑誌資料を中心に分析し、また『東亜日報社史』『大韓体育会史』などからも当該期のスポーツ活動の実際を確認する。

(２)孫基禎については『読売新聞』、『東京朝日新聞』『東京日日新聞』や『京城日報』『東亜日報』『朝鮮日報』『朝鮮中央日報』などの新聞資料を中心としながら当該期の孫基禎の評価ならびに彼の行動を確認し、さらに『アスレチック』『オリムピツク』『体育日本』、あるいは『朝鮮』『文教の朝鮮』『朝鮮行政』『朝鮮及満州』などの雑誌資料などからも本研究課題に関わる言説を収集・分析していく。また上記資料に加えて、内務省警保局が発行していた『特高外事月報』などや『緑旗』、孫基禎の自叙伝も参考資料とする。

(３)朝鮮体育会に関しては『大韓体育会史』や『大韓体育会 70 年史』を中心に当該期の体育会の状況を把握するとともに、『親日人名事典』から体育会の役員のなかで対日協力行為を行っていた人々を確認し、体育会と対日協力の傾向をみていく。

４．研究成果

(１)植民地朝鮮における朝鮮人知識人らが抱いていた被支配者としての劣等感、また民族の身体的劣等性をいかに払拭しようとしたのか、また彼らが抱いた劣等感が払拭されるに至った瞬間までをいくつかの言説・事例とともに考察してきた。

張徳秀や金昌世の言説でみられたように朝鮮人知識人らは自らの民族の「身体」が西洋（欧米諸国）、また日本と比べて劣っていることを認識したうえで、民族の「身体」をいわゆる近代的な「身体」に改良していこうとした。それを進めることに寄与した活動の典型として東亜日報社のスポーツ事業が挙げられる。東亜日報社は当該期の朝鮮社会に近代的な価値観を付与する手段としてスポーツを利用し、それらが社会に浸透していくことで民族の「身体」が近代性を帯びたものになることを期待したのだった。

そして 1930 年代になると国際スポーツの場に朝鮮人選手らが出場し、西洋諸国と肩を並べることのできる民族の「身体」が現れることになる。さらにオリンピック競技大会での朝鮮人選手らの活躍はそれまで有してきた

朝鮮人知識人らの抱いていた劣等感が払拭される契機ともなった。
　ここではスポーツが植民地朝鮮において果たした役割・機能の一端を近代性をキーワードに考察してきたが、では本論でみてきたような出来事により最終的に民族の「身体」は近代性を帯びた「身体」へとシフトすることができたのかというと、答えは否である。何故なら朝鮮人知識人らが歓喜した朝鮮民族の「身体」は飽くまでパフォーマンスに秀でた極少数のスポーツ選手の「身体」であり、残念ながら彼らは制度的には日本を代表する選手たちであったからである。ゆえに彼らの「身体」は植民地権力側の内鮮融和というスローガンに包摂される可能性を常に含んでいた。ただこうした国際舞台で活躍できるスポーツ選手の存在が朝鮮人知識人らの、あるいは朝鮮民族の励みになったことは確かであり、朝鮮民族のナショナリズムを掻き立てることになったことも事実であろう。

(２)次に 1930 年代にロサンゼルス、ベルリンで開催された二つのオリンピック競技大会に植民地朝鮮から日本代表選手として参加した朝鮮人選手らに着目しつつ、彼らが国際スポーツの場に登場していくことの民族的な意義、またそのときに彼らが抱えた不安や葛藤の裏側に存在した植民地権力と朝鮮民族のナショナリズムに着目しながら検討を進めた。そのなかでもベルリン五輪で金メダルを獲得した英雄孫基禎に焦点を当て、植民地権力と朝鮮民族のナショナリズムがそれぞれの表象としての英雄孫基禎を巡る軋轢のなかで孫基禎の行動を規定する非対称的な二つの力が最終的に彼の行動にどのような影響を与えたのかを明らかにするものであった。本研究で明らかになった点は以下の通りである。
1. 朝鮮人選手が日本代表としてオリンピックに参加したのは 1932（昭和 7）年のロス五輪からであり、3 名の朝鮮人選手が参加している。とりわけ植民地朝鮮でもその当初から競技力の高かったマラソンには金恩培・権泰夏という 2 名の朝鮮人選手が日本代表予選を勝ち抜いてオリンピック競技大会に参加し、金恩培は 6 位、権泰夏は 9 位という結果を出している。そして国際スポーツの場面での彼らの活躍は植民地支配を甘受する朝鮮民族の劣等感を昇華させる役割を果たしていた。
2. ベルリン五輪には 7 名の朝鮮人選手が日本代表としてオリンピックに参加しているが、選手選考のなかで朝鮮人選手らは朝鮮民族と日本という国家の狭間でダブルバインドの状態に陥っていた点が見受けられた。しかし民族主義者らの価値観のなかには当該期における優生的な思想の影響もあり、国際スポーツの場に朝鮮人選手らが参加することは望まれることであった。そのため朝鮮人選手のオリンピック参加を促す態度が確認され、その参加を後押しすることになっている。
3. ベルリン五輪における孫基禎と南昇龍の活躍は日本、植民地朝鮮それぞれにおいて熱狂を齎した。しかしその活躍の報道についてはそれぞれの認識に齟齬があり、日本は 24 年目にして念願のマラソン金メダルを朝鮮人選手が齎したという主唱のなかで「内鮮融和」が謳われ、一方、植民地朝鮮では民族主義者らによって「民族の優秀性」が主唱されていた。
4. いわゆる日章旗抹消事件は東亜日報社の運動記者李吉用が主導して実行されたが、それに対する朝鮮総督府の取締は厳しく、東亜日報社・朝鮮中央日報社は無期停刊処分を受けている。この事件に対する当局の認識は孫基禎の優勝が内鮮融和に資するものであるという認識であり、民族的対立が助長されるような事態に対して危惧を示し、事件の関係者らに対して弾圧を加えていた。
5.日章旗抹消事件の影響は孫基禎と南昇龍にまで及び、彼らは警戒される存在として帰朝することになった。当局のここでの警戒は英雄となった孫基禎と南昇龍が戻ってくることによって多くの朝鮮人が特定の場所に集まって群衆となり、民族主義に基づいた政治的な活動を起こさないだろうかという警戒であった。
6.日本・植民地朝鮮の英雄となった孫基禎は植民地権力と朝鮮民族のナショナリズムの相克のなかに生き、日本と朝鮮民族の双方の英雄として表象される存在へと化していった。そして最終的には対日協力に加担せざるをえない状況にまで追い込まれていったのである。
　本研究は「オリンピック」という英雄を創出するシステムによって齎された悲劇のひとつを提示したものでもあった。「オリンピック」という場が欧米諸国（西洋近代）への接近と参画を意味するものであったと捉えると朝鮮人民族主義者らが若き朝鮮人スポーツ選手らをたとえ帝国日本を経由してでもその場に送りたいと願ったのは朝鮮民族の能力を世界の標準として示しうることができると考えたからであり、そのことは同時に植民地支配を否定したい悔しさの裏返しでもあったことは容易に想像される。そうした心情は朝鮮民族のナショナリズムに還元され、ナショナリズムの高まりに比例して植民地権力との軋轢は高まっていった。その高まる軋轢の位相のなかに朝鮮人スポーツ選手らは自らの身を擲つこととなる。殊に英雄孫基禎の擲たれた身体は非対称的な力のコンフリクトなかで強まった権力の網の目から抜け出せなくなり、「内鮮一体」の表象と化すことにもなっていく。それは彼自身の生活圏が植民地権力の柵とともに推移していったことからも理解されよう。ただ彼の植民地権力への協働はこうした非対称的な力の存在を無視して語ることはできず、「オリンピック」という巨大なシステムに飲み込まれていった朝鮮民族のナショナリズムと植民地権力が織り成す一連の流れのなかで理解されるべきものである。
　本研究の対象とする時代、支配－被支配の関係にあった日本と朝鮮半島においてスポー

ツは「支配」を助長させる論理、「抵抗」を示す論理が存在し、その先に「協力」という選択肢が用意されていた。スポーツ選手らは常にそれぞれのアクターの期待した表象となる可能性を秘めていたのであり、その表象のなされ方によってそれぞれの論理に与することにもなっていた。それは自己の選択であると同時に他者との関係のなかで決定された選択でもある。植民地朝鮮のスポーツ選手は日本という国家と対峙したとき、常に向かうべき道の選択を迫られた。これは自由な選択とは程遠いものであり、その選択の位相は植民地権力やナショナリズムといった同時代性を反映する見えざる力が作用する場であったと考察される。

(３)朝鮮体育会に着目して分析した結果は以下の通りである。

朝鮮体育会の役員を務める多くの朝鮮人は植民地期に行った対日協力行為を指摘されており、その活動は真に民族的であったという評価を下すには難しい部分もある。とりわけ会長を務めた尹致昊、崔隣、兪億兼らは総力戦体制期の朝鮮人の戦時動員に関与した経歴があり、彼らと植民地権力との癒着の意味するところは今後も考察していく必要があるものと思われる。

朝鮮体育会が再組織される前、解放直後に各スポーツの任意団体・連盟が成立していくなかその嚆矢として朝鮮体育同志会が結成されている。その委員長には李相佰が、総務委員に張権、李栄敏、李鍾九、権泰夏、鄭商熙、丁相允、林東洙などが名を連ねている。この同志会は朝鮮半島に進駐してきたアメリカ軍とバスケットボールや野球などのスポーツを通した交流を行ったとされる。

解放後、朝鮮体育会はこうした同志会を母体にしつつ、11 月 26 日に再組織され、その第 11 代会長に呂運亨が推戴された。呂運亨を会長に据えたことがこの当時の朝鮮半島情勢を反映しているとも言えるだろう。副会長には植民地期に最後の会長となった兪億兼が、常務理事には日章旗末梢事件を主導した当時東亜日報の運動部の記者であった李吉用が入っており、また同志会の委員長でもあった李相佰やオリンピック競技大会（ロサンゼルス）に参加した金恩培なども役員に入っている。このように役員名簿をみただけでもこのとき組織された朝鮮体育会は植民地期に対日協力行為を行ったものが存在している一方で民族主義者と評価される人々も存在しており、両者が入り交じった状態であることが興味深い点でもある。ただこれらに関する分析は今後の課題としたい。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①「植民地朝鮮における近代性と民族の「身体」―スポーツによる民族的劣等感の払拭―」植民地教育史研究年報第 17 号（単著）(2015 年 3 月)

〔学会発表〕（計５件）
①「孫基禎のジレンマ―総力戦体制下の対日協力―」東北アジア体育・スポーツ史学会第 11 回大会 2015 年 8 月
②「植民地朝鮮と国際スポーツ−朝鮮人にとってのオリンピック競技大会参加の意義−」朝鮮史研究会第 51 回大会パネル報告 2014 年 10 月
③シンポジウム「植民地近代と身体」　「植民地朝鮮における近代性と民族の「身体」―スポーツによる民族的劣等感の克服―」（シンポジストとして）日本植民地教育史研究会第 17 回大会 2014 年 3 月
④「植民地朝鮮における民族の「健康」と「身体」に関する考察ー朝鮮人知識人の言説に着目してー」日本健康行動科学会第 12 回学術大会 2013 年 9 月
⑤「東亜日報グループとスポーツに関する研究-スポーツによる「民族」の近代化-」東北アジア体育・スポーツ史学会第 10 回大会 2013 年 7 月

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
金　誠（KIN,Makoto）
札幌大学 地域共創学群・准教授
研究者番号：40453245

(2)研究分担者

(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者

(　　)

研究者番号：